

『自然諷詠』とKigologiaをめぐって:
日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白石, 佳和, Shiraishi, Yoshikazu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065565

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: integralização e convergência / Organizadores: Yūki Mukai, Kimiko Uchigasaki Pinheiro, Kaoru Tanaka de Lira, Marcus Tanaka de Lira e Yuko Takano. – 1. ed. – Campinas, SP : Pontes Editores, 2021.
figs.; tabs.; quadros; fotografias.
E-Book: 13 Mb; PDF.

Inclui bibliografia.
ISBN: 978-65-5637-297-6.

MÚTIPLAS FACES DE PESQUISA JAPONESA INTERNACIONAL:

Integralização e Convergência

『自然諷詠』とKIGOLOGIAをめぐって
— 日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割

**“NATURE VERSE (SHIZEN-FUEI)” AND KIGOLOGIA
— THE ROLE OF GOGA MASUDA AS A MEDIATOR
BETWEEN NIKKEI HAIKU AND BRAZIL HAICAI**

白 石 佳 和
(高岡法科大学)

『自然諷詠』とKIGOLOGIAをめぐって
— 日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割

**“NATURE VERSE (SHIZEN-FUEI)” AND KIGOLOGIA
— THE ROLE OF GOGA MASUDA AS A MEDIATOR
BETWEEN NIKKEI HAIKU AND BRAZIL HAICAI**

白石佳和¹（高岡法科大学）

要旨： 俳人増田恆河は日本語歳時記『自然諷詠』とポルトガル語歳時記『NATUREZA』の二つの歳時記を編纂した日系ブラジル人である。本論文ではこの二つの歳時記の比較により、増田恆河がどのようなプロセスで『NATUREZA』を編纂したのか、という問いについて論じた。二つの歳時記の比較分析から、増田恆河が、段階的に日本的な季語を排除しながら、本当の意味でのブラジルの季語を選び、季節の感覚やイメージを説明する歳時記を編纂しようと試みたことがわかった。それは言い換えれば、増田恆河の視点が、日本コミュニティの一部としての日系ブラジル人の視点からブラジルコミュニティの中の日系人という視点に転換したことを示す。その背景には、ブラジルハイカイは、ブラジルの自然を詠む短詩であり、そのために真の意味でのブラジルKIGOを編纂したKIGOLOGIAが必要とされ、それがブラジル文化への貢献につながるという増田恆河の信念があった。

キーワード： 増田恆河，歳時記，季語，ブラジルハイカイ，日系俳句

Abstract: The haiku poet Goga Masuda, who was active in both Brazilian Nikkei haiku and Brazil Haikai, compiled two Kigologia, one in Japanese, “Nature Verse”, and the other in Portuguese, “NATUREZA”. The purpose of this research is to compare these two Kigologias and to ask the question

1 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国語国文学専攻修了，東京大学大学院人文社会系研究科博士課程日本文化研究専攻単位取得退学（修士，文学） 高岡法科大学准教授 E-mail: ykshiraishi@takaoka.ac.jp.

of how Masuda compiled “Natureza”. From the comparative analysis of the two Kigologias, Masuda attempted to compile a Kigologia that explains the sense and image of the seasons by selecting the true Brazilian seasonal words while gradually eliminating the Japanese seasonal words. In other words, Masuda’s perspective shifted from that of Japanese-Brazilians as part of the Japanese community to that of Nikkei in the Brazilian community. Behind this shift was his belief that Brazil Haikai is a short poem about Brazilian nature, and therefore KIGOLOGIA, a compilation of Brazil KIGO in its true sense, was necessary and would contribute to Brazilian culture.

Keywords: Goga Masuda. Kigologia. Seasonal words (KIGO). Brazil Haikai. Nikkei haiku.

1. 問題の所在―日系コロニア俳句とブラジル・ハイカイ

1.1 ブラジル俳句の独自の発展と増田恆河

俳句の国際化が叫ばれるようになって久しい。20世紀初期にフランスに伝えられたハイクは、ヨーロッパやアメリカに広がり、アメリカ、イギリス、ドイツなど俳句協会がある国も多い。日本でも1989年に国際俳句協会（HIA）、2000年には世界俳句協会（WHA）が設立された。1999年には、俳句の国際化を推進するための「松山宣言」も行われている。研究面でも、東・藤原編2012のような国際歳時記の研究成果も報告されるようになった。2017年には、俳句をユネスコ無形文化遺産に登録しようという活動も始まっている。

ヨーロッパやアメリカにおける俳句活動が広く認知されているのに比べ、南米²、特にブラジルの俳句の独特な展開については、まだ日本・世界でほとんど知られていない。その独特な展開とは、ブラジルでは日系移民が持ち込んだ日本語による俳句（＝日系俳句³）と、フランス経由で伝えられたハイカイ（＝ブラジルハイカイ⁴）、この二つの俳句の展開がそれぞれあり、さらにはその二つが交差する局面が見られる点である。⁵

日系俳句とブラジルハイカイの二つにまたがって活躍したのが、日系一世増田秀一（俳号恆河）である。彼は、ブラジルの日系俳句雑誌『木蔭』の初期メンバーであり、また季語を詠み込む有季ハイカイ（ポルトガル語によるハイカイ）を推進したグレミオハイカイベーの設立メンバーの一人でもある。

2 アルゼンチンでも、日系移民が直接持ち込んだ日系俳句とヨーロッパやメキシコ経由のハイカイ、2つのルートの俳句受容が見られる（井尻香代子2019『アルゼンチンに渡った俳句』丸善出版）

3 「コロニア俳句」「ブラジル俳文学」などと言う場合もあるが、本論文ではブラジルの日系人が日本語で詠んだ、日系ブラジル文学における俳句を総称して以下「日系俳句」と呼ぶ。

4 「ポルトガル語ハイカイ」とも。20世紀初頭にアフラニオ・ベイショットがフランスのクーシュの論考の中のHaikaiを紹介したのが最初。（増田1986）以下、本論文ではポルトガル語によるハイカイの総称を「ブラジルハイカイ」と呼ぶ。

5 久富木原玲(2018)は、ブラジルの日系社会における日本語の俳句と、20世紀初期にフランス経由で伝えられたポルトガル語のハイカイ、この二つの流れがあり、さらにはこのふたつの流れが融合した「第三の流れ」もある、と述べている。

1.2 増田恆河略史

「俳諧小史」（栢野2006）を参考に増田恆河の略歴をまとめると、次のようになる。彼は一九一一年香川県に生まれ、二九年渡伯、その後、四八年パウリスタ新聞に入社し十年間勤務、その他の仕事を経て、引退後は俳句、絵画、著作に傾倒、八四年よりアグロナッセンテ誌（筆者注：農業雑誌）の俳壇選者となり、ブラジル俳句、季語集「自然諷詠」を出版。又、「グレミオ・ハイカイ・イペー」を創設し、季語のあるポ語（筆者注：ポルトガル語）のハイカイ普及に力を注いだ。増田恆河編『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』の著者紹介によれば、「1935年佐藤念腹に師事。」とあり、ブラジルに移住して6年、24歳のときから俳句を詠んでいると思われる。佐藤念腹はブラジル日系俳句の父ともいえる存在であり、高浜虚子（『ホトトギス』主宰）の花鳥諷詠の教えをブラジルで広め、一九三〇年代から半世紀以上新聞俳壇の選者をつとめた。大戦後、雑誌『木蔭』を創刊、ブラジルの日系俳壇に一大勢力を築いた。その佐藤念腹の指導を受け、増田恆河は戦前の『ホトトギス』にも何度か入選し、念腹が選者を務めたパウリスタ新聞の俳壇や雑誌『木蔭』などで活躍した。佐藤念腹は新潟出身で、新潟大学に勤務していた中田みずほ（俳誌『まはぎ』（1929～1975）主宰）や4Sの一人、高野素十と親交があった。増田恆河も念腹を介してその二人との縁があったと思われる。みずほと素十の死後、二人が主宰していた結社『まはぎ』と『芹』を合わせた形で『雪』という結社（主宰 村松紅花）ができるが、増田はその雑誌に初号から参加している。

彼の活動で注目すべきは、一九八〇年代以降の活動である。ハイカイ研究会「グレミオ・ハイカイ・イペー」の創設に加わったことから、ブラジルハイカイに深く関わるようになった。栢野（2006）には、「ブラジルの連句」「ポルトガル語ハイカイ」の小章がある。その記述によると、一九八四年に連句研究会、一九八七年にグレミオ・ハイカイ・イペーが設立され、九〇年代には有季ポルトガル語ハイカイのアンソロジー句集やポルトガル語季語集を出版するなど、積極的な活動を行なっている。八〇年代以降は活動の軸足を日系俳句からブラジルハイカイに移しているのである。

増田恆河は、一九九〇年代に、次の二つの歳時記を上梓した。一つは、『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』という日本語歳時記（1995）、もう一つは『NATUREZA—BERÇO DO HAICAI』（1996）というポルトガル語歳時記である。

1.3 問題の所在

増田恆河は、ブラジルで日本語歳時記とポルトガル語歳時記の両方を編纂した唯一の人物であり、世界的にみても、二つの言語で歳時記を編纂したのは管見のかぎりでは増田しかいな

い。⁶この連続して出版された増田の著作は、彼が日系俳句とブラジルハイカイにまたがって活動した背景や意義と大きく関わると思われるが、彼の歳時記および文学活動についての研究は Tavares (2019) 以外ほとんどなく、彼がどのようなブラジルハイカイの活動を行なったのか、また何を目指していたのか、は明らかにされていない。そこで本稿では、この二つの歳時記を手がかりに、日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした文学史的役割の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 日系俳句におけるブラジル歳時記の研究

まず、日系俳句のブラジル歳時記についての研究を整理する。日系俳句のブラジル歳時記について書かれた論文は、栢野 (2006)、藤原 (2012)、細川 (2013) である。これらの研究によると、日系俳句において季語・季題ならびに歳時記の編纂は重要なテーマで、様々な歳時記が出版されている。

藤原 (2012) によれば、ブラジル歳時記の全体の構成は、夏 (1月)・秋・冬・春・夏というものが多いが、増田恆河の歳時記『自然諷詠』では春 (9月・10月・11月) 夏 (12月・1月・2月) 秋 (3月・4月・5月) 冬 (6月・7月・8月) という構成である。それぞれの季節の中で季題を6つ (時候・天文・地理・動物・植物・人事) に分類しているのはどの歳時記も同じである。また、細川 (2013) では、梶本編『ブラジル季寄せ』がブラジル季語に☆印を付けていることや『自然諷詠』に季語項目のポルトガル語訳がつけられていることを指摘している。

2.2 ブラジル季語の問題を巡る研究史と課題

日系俳句の歳時記の研究で藤原2012・細川2013が共通して触れているのが、「ブラジル季語」の問題である。ブラジル季語とはブラジル独自の季語、日本にないブラジルの自然や生活の中から選出された季語、という意味である。外国で俳句を詠むとき、季語は大きな問題の一つである。細川は「俳句が生まれた国とはまったく異なる気候と行事と動植物相の土地で、いかに季語を設定するか。これは俳人の悩みの種であり、また意欲をかきたてる問題だった」(細川2013)と述べ、ブラジル季語について、市毛編『季題分類』や『ブラジル俳句集』『パウリスタ俳句集』の季題、また特に梶本編『ブラジル季寄せ』を中心にブラジル季語を分析している。藤原2012では佐藤牛童子編『ブラジル歳時記』と日本の歳時記を比較し、ブラジル季語を分類している。藤原2012・細川2013をもとにブラジル季語を分類すると、以下のようなものがある。

・ブラジルにしかない動植物をカタカナ語で掲載 (イペー、ピラルクーなど)

6 アメリカで出版された日系俳句の『ハワイ歳時記』には、季語項目の英語訳があるという情報があるが未確認。

- ・日本にも共通する動植物が種類多く列挙されている（蛙、蛇、蘭など）
- ・ブラジル特有の気候・天文（雨季、乾季、南十字星など）
- ・キリスト教関係の行事、ブラジルの記念日、ブラジル俳人の忌日
（以上、藤原2012より）
- ・農作業に関するもの（珈琲植う、山焼き、ムダンサ（転耕）など）
- ・日本の季語の言い回しの転用（南風（南窓塞ぐ）＊北風（北窓塞ぐ）、煙曇＊花曇など）
- ・ブラジル特有の現象・事象（カジュの雨、木肌を脱ぐ、野犬狩りなど）
（以上、細川2013より）

藤原が指摘した点は、ブラジルの動植物や気候・天文を含めた自然とブラジルの行事である。それに対し、細川が指摘した上記の点は、ブラジル全体の季語というより日系ブラジル季語とでも呼ぶべきかもしれない。例えば、農作業に関する季語は、「珈琲植う」「牧手入れ」など、日本の農業季語の発想から生まれている。日系俳句は、移民の苦労の中から詠まれた側面を持っているだろう。また、季語は単なる事物の名前ではなく生活の中で育まれた文化が言葉として結晶化したものである。その事物をどう感じるか、どうイメージするか、つまりその語を使ってどんな句を詠むか、と密接に関わっている。たとえば、「啓蟄」という季語は、「春になって虫などが穴から出てくる」現象をさす。単なる「虫」ではない。これは日本の独特の感覚といえる。このように、日本の感覚でブラジルの自然を眺めてできたのが日系俳句の「ブラジル季語」であることは注意したい。

では、増田恆河はブラジル季語をどのように捉えていたのだろうか。彼は「雷」という季語を例に次のように説明する。（増田1995a）

雷や四方の樹海の子雷 念腹 の句に詠み込まれた雷という季語はブラジルの雷を表している季語であり、この句の季題としてなくてはならぬ存在となっている。日本の季語であるからという理由で、この雷を日本の雷と解釈することはできないであろう。

細川2013の解説によると、日本語の雷がポルトガル語の「travão⁷」だとすると雷鳴のことであり、落ちる雷ではない。「子雷」は雷鳴のこだまと解釈される。日本の季語の雷からこの句のブラジルの解釈を導き出すのは容易ではない。同じ季語でも日本の感覚とブラジルの感覚が異なるならば、「これまでにこの国で詠まれた俳句は、訪日吟を別として、そのすべてに使われた季題はブラジルの季語であると解するのであって、日本には無いところのブラジル特有の季語はもちろんのこと、その全体を一括してブラジル季語と称してよいであろう。」（増田1995a）と増田は述べる。

7 原文ママだが、スペルミス。雷は正しくは「trovão」

日本以外で詠まれる俳句での大きな問題の一つは季語である。その問題についてブラジルでは、ブラジル独特の風土を句に詠む中でブラジル季語を徐々に形成し、藤原2012や細川2013がそれぞれブラジル季語の特徴をまとめたが、そのブラジル季語というのはいわば日本移民から見たブラジルの自然であった。それに対し、増田はブラジルで詠む俳句の季語すべてがブラジル季語なのだ、と言い切る。その増田の主張が歳時記から読み取れる彼の考え方とどの程度一致するのか、今回の分析結果から明らかにしたい。

2.3 増田恆河に関する研究史

日系俳句の研究で増田恆河に言及しているのも、藤原2012と細川2013である。藤原2012では、佐藤牛童子2006『ブラジル歳時記』をもとにブラジル独自の季題の特徴を分析し、増田1995a, 1996を参照しながらブラジルの俳句とハイカイでのありようをまとめてブラジル現地に根ざした季語の確立・歳時記編纂の努力が続けられてきたことを評価する。

細川2013では、日系歳時記の分析のまとめとして、増田恆河のポルトガル語ハイカイ（ブラジルハイカイ）に触れながら次のように述べる。「彼にとって、ブラジルの日本語俳句は本国の俳句よりも、同国のポルトガル語ハイカイに近い。二言語ならではの立場で、日本文芸の同化について多くを示唆している。私は移民の俳句作りを本国の文芸との関連ばかりで考えてきた。しかし恆河の考えを拡張すれば、ブラジルの風土や感慨を詠むかぎり、それは適応・同化の道を拓いていることになる。」細川はブラジル日系文学を本国（日本）との関連でみてきたが、増田恆河の論考（1995a, 1996）を分析し「俳句という形式、日本語という道具」を使ってブラジルと同化していく方向性を読み取っている。しかし、本当にブラジルとの同化を目指していたとその論考から読み取れるのか、また彼の仕事である二つの歳時記がその解釈を実証できるのか、は確認できていない。

2.4 研究目的

以上、これまでの先行研究をまとめてきたが、そこから浮かび上がってきた課題として次のようなことが挙げられる。まず、増田恆河がブラジルハイカイにおける季語、特にブラジル季語をどのように捉えていたか、という問題である。日系俳句では『自然諷詠』以前にいくつかの歳時記や季題別句集が出版されており、増田恆河が『自然諷詠』を編纂する際も梶本北民編『ブラジル季寄せ』を参照したことは明らかである。『自然諷詠』はこれまでの日系俳句における成果の土台の上に成り立っている。では『NATUREZA』はどのような歳時記なのだろうか。日系歳時記をそのまま翻訳しただけなのか、それともそうではない何かの工夫があるのか。『NATUREZA』を『自然諷詠』と比較することで彼の季語に対する考え方を確認し、『NATUREZA』の文学史的な位置づけや増田恆河の役割、貢献について明らかにしたい。

3. 研究方法

研究方法は、『自然諷詠』と『NATUREZA』の比較である。なお、以下『自然諷詠』を「J」、『NATUREZA』を「P」と省略する場合がある。また、データが大量なので、今回は「春」の季語のみで比較を行う。

歳時記の比較は、両者に共通の季語、それぞれの独自の季語を調べ、共通のもの、独自のものの、それぞれどういう特徴があるのか検討する。『自然諷詠』においてすでに季語項目のポルトガル語訳がなされているので、最初にそちらの分析を行う。

①『自然諷詠』の季語項目のポルトガル語訳

：ポルトガル語訳があるものとないものがあり、その分類の方法を分析

②『NATUREZA』と『自然諷詠』の季語項目の比較

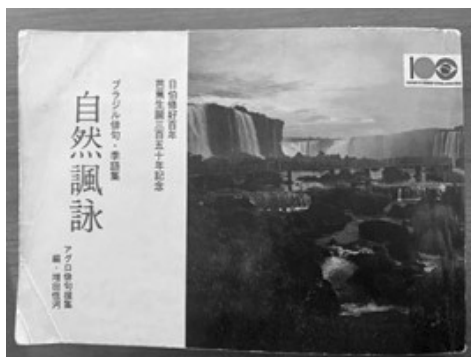
：数的な比較および内容についての比較（共通、P独自、J独自に分類し、そのラベリングの論理を分析）

4. 分析結果と考察

4.1 二つの歳時記の書誌情報

考察に入る前に、二つの歳時記の書誌情報と全体の特徴について確認する。

図1- 二つの歳時記の表紙写真



『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』



『NATUREZA—BERÇO DO HAICAI』

まず増田恆河編(1995)『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』(日伯毎日新聞社)の特徴について述べる。特徴は(1)春・夏・秋・冬の順番(他の歳時記は1月〜12月の順)(2)例句の部と季語解説の部を分ける(3)季語項目みポルトガル語訳を付与していることである。

例えば『自然諷詠』の後半の季語解説の部分には、季語解説の最後にその項目のポルトガル語訳がついている。「春寒」という項目には、「春が来たと思った後に来る寒さ。春寒し、寒き春。感じのうえにやや相違があるのは余寒、残る寒さ。Frio de primavera」つまり、解説部分は、解説+同類の季語+ポルトガル語訳、という構成である。ポルトガル語は複数あるときもある。

他の特徴として『ブラジル季寄せ』を中心に様々な資料を参考にしている点が挙げられる。「あとがき」の編集方針によると、『パウリスタ俳句集』(佐藤念腹編、一九五二年)や梶本1981の季題・季語解説、さらに橋本梧郎(俳号垂南)監修の季題集⁸その他の歳時記類若干を参考にしている。橋本梧郎はブラジルで著名な植物学者であり、増田恆河のエメボイ実習場での後輩である。また、1984年1・2月号から増田恆河が選者を務めた農業雑誌『アグロ・ナッセンテ』の文芸欄『アグロ俳句』の投句が撰集の例句の資料となった、との記述がある。この雑誌の出版社『アグロ・ナッセンテ』社(日伯毎日新聞社)がこの歳時記の出版社でもある。

その他、いくつか気づいた点に触れておく。巻頭に「俳諧金言」がある。これは、たとえば「不易流行 芭蕉「山中問答」」のように、連歌俳諧の先達の短い言葉を引用し並べたものである。心敬、子規、虚子らの言のほか、自分の師系である念腹、素十、紅花らの言葉もある。このような戒律的な言葉を紹介するのは、増田恆河の特徴かもしれないが今は深入りしない。金言のあとには「畏友梶本北民の霊に捧ぐ」という献辞があり、この歳時記の成立経緯に梶本北民が深く関わっていることがわかる。この歳時記には「北民忌」という季語が冬の季語の最後に掲載されている。また「あとがき」にも、北民が死の直前に「(自分の歳時記である)『ブラジル季寄せ』の不備を気遣い、改良して欲しいと言ひ遣した」ので後半の季題集(季語解説部分)を加えたのだ、とする。当初は季題別俳句集の編纂予定だったのかもしれない。

次に『NATUREZA—BERÇO DO HAICAI』の特徴について述べる。邦訳は「自然：俳諧の揺籃」である。その特徴は(1)春・夏・秋・冬の順番(2)季語解説の部(kigologia⁹)と例句の(antologia)に分かれることである。

編者は増田恆河だけでなくその姪のテルコ・オダが加わる。巻末には、「柿とハイカイ」「ハイカイのアイデンティティ」「ハイカイの十戒」「季節の言葉」「理論と実践」「季語の大切さ」「芭蕉の詩歌と禅」「ハイカイのローマ字」の短いエッセイがある。今回は、KIGOLOGIAの部

8 間島稲花水・渡部南仙子編(1977)『ブラジル歳時記』ブラジル俳人協会

9 シイロ・カット・プレッタという詩人・ハイカイスタが季語表をKIGOLOGIAと名付けた。(増田1994)

分のみを研究対象とする。解説部分の特徴として、Poét.¹⁰（詩情）Sensação（感覚）がときどき含まれることが挙げられる。日本の歳時記と同じく、辞書的な記述だけでなくポエジーや感覚を含めて季語を説明しようとする姿勢がうかがえる。

4.2 『自然諷詠』と『NATUREZA』の比較

4.2.1 『自然諷詠』の季語項目のポルトガル語訳

まず、『自然諷詠』の季語項目のポルトガル語訳について考察する。分析の結果、ポルトガル語に訳されていない季語がいくつか見られた。表1にポルトガル語がない季語を春のみ示す。春を例にとると『自然諷詠』における春の項目数は327だが、そのうち約5分の1強にあたる61がポルトガル語をもたない。季題分類別にみると、人事が27/81(33%)と最も訳されていないものが多かった。一方植物は、訳されていない季語は10%程度であった。

表1- 『自然諷詠』（春）の中でポルトガル語訳がない季語

時候	天文	地理	動物	植物	人事	
うららか	春陰	春泥	獺の祭り	海棠	朝寝	田螺和え
冴え返る	春雪	春の水	落し角	柿若葉	枸杞めし	椿餅
春昼	花曇	山笑う	亀鳴く	茎立	草餅	摘み草
春窮	春の闇	3/13	桜貝	竹の秋	木の実植う	菜飯
晩春	4/34		巢立ち	蓴生う	木の芽和え	墓参り
5/25			田螺	猫柳	桜餅	芭蕉忌
			蠅生まる	海苔	作地割	春祭り
			蜂の巣	花	挿し木	報恩講
			引鴨	薬（ひこばえ）	潮干	麦踏み
			9/52	古草	子規忌	目刺
				水草生う	春眠	目貼り剥ぐ
				ミョウガダケ	春愁	流燈
				若葉	春燈	炉塞ぎ
				13/122	素十忌	27/81

10 「Poét.」はPoeticaの略。ピリオドを含む。

次に表1の季語を更に傾向ごとに分類したものを表2に示す。

表2- ポルトガル語に訳されなかった季語の特徴別分類

日本独自のイメージ・情感	山笑う、うららか、春眠
動植物の一側面	亀鳴く、蓴生う、蘘、若葉、竹の秋
料理	枸杞飯、田螺和え
農業	挿し木、作地割（珈琲関係ではボ語があるものも多い）
忌日	子規忌、素十忌、芭蕉忌 *念腹忌はボ語あり

動物や植物の名前をポルトガル語にするのはそれほど難しくないと予測したが、実際に動植物の名前はポルトガル語に訳されていた。「啓蟄」のような季語は、春になって冬眠していた虫がうごめき穴から出てくるという現象を指す言葉であり、このような現象に春を感じる中国由来の日本文化だと思われるが、この語にもciclo metamórfico（ライフサイクル）というポルトガル語訳がついていた。

「冴え返る」という季語にはポルトガル語訳がなかった。これは、この感覚がブラジルにはなくブラジル人に伝わりにくいので、あるいはこの語に対応するポルトガル語の訳語が見当たらないので、ポルトガル語の翻訳がなされなかったと推測できる。

「動植物」の名前については、単純にそのものに対応するポルトガル語があるかどうかの問題であり、対応する語があればポルトガル語がつくわけだが、先ほどの「啓蟄」のように動植物のある一面・現象を捉えた場合、その捉え方は文化的なものであり、翻訳が難しくなる。「竹の秋」のように、単に竹でなく秋が来たように黄色くなる竹となると、それを表すポルトガル語がない。「猫の恋」など現象的なもので翻訳された語もある。料理・忌日ももちろん日本の文化でありポルトガル語で表現しにくくブラジル文化には入りにくい。農業的な季語は日本的である一方、ブラジルには農業移民が多いのでブラジルでも理解できるものもある。「珈琲植う」のような季語は日系移民のみ理解できるのかブラジル文化全体で理解できるのか、は増田恆河も迷いがあつたであろう。「日本独自のイメージ・情感」というのも難しい問題である。確かに、「山笑う」という季語に対応するポルトガル語はない。しかし、『NATUREZA』の「Montanha de primavera（春の山）」の項には、詩情として「微笑む山」が挙げられている。季語として対応していないが、詩情の説明などに日本的な感覚をNATUREZAに入れようとする例は他にも見られる。

なお、春の部でポルトガル語訳がない61の季語のうち、2つだけNATUREZAに採用されたものがある。1つは「花」という季語である。俳句・連句では「花」は桜の花をさすが、ただ1語でFLOR（英語のflower）で表すといわゆる総称としての花と誤解され、かといってFlor de cerejeira（桜の花）では、花の種の1つとしての桜となり、「花」のニュアンスが伝わりにく

い。『NATUREZA』では「花」という語が象徴的な意味を持ち日本では桜、ブラジルではイペー¹¹をさすことをポルトガル語で解説している。もう1つは「流燈」であるが、これはきちんと対応していると言い難い例である。ブラジルでは11月2日が「死者の日」と呼ばれ行事があるが、日系人がお盆と解釈し灯籠流しを行なった。NATUREZAでは「死者の日」とし「流燈」には触れない。

これらの季語は、ブラジルに住む日系人である増田恆河から見た「日本季語」（日本的な诗情・感覚を持つ季語）だといえる。これまで、日系人が日本・日本人というアイデンティティの中でブラジルらしい季語すなわち「ブラジル季語」を見つけた。増田恆河は日系人でありながら、日系人だけでなくポルトガル語を話すブラジル人を意識してポルトガル語をつけた。ここには大きな視点の転換が行われている。ポルトガル語をつけることによって、ブラジル文化に入れられない日本季語を選別・除外する意識が芽生えたのである。これら「日本季語」のほぼすべて、『NATUREZA』に立項されていないことを考えるとやはり『自然諷詠』の時点でフィルターがかけられたとみてよい。

4.2.2 『NATUREZA』と『自然諷詠』の季語項目の比較

次に、『NATUREZA』（以下P）と『自然諷詠』（以下J）の季語項目の比較を行う。全体的に見出し語数（季題の異名はふくめず目次に立項されているもの）は、『NATUREZA』1400、『自然諷詠』1580で、後者が180多いが規模としてはほぼ同程度である。季節ごと、季節の中の季題分類（時候、動物など）ごとの量的比較が表3である。

表3- 季節別、季題分類別の季語数の比較

春	P	J	夏	P	J	秋	P	J	冬	P	J
時候	27	25	時候	22	37	時候	20	29	時候	21	25
天文	33	34	天文	45	32	天文	31	29	天文	33	27
地理	12	13	地理	19	12	地理	13	13	地理	13	13
動物	60	52	動物	186	114	動物	72	54	動物	20	29
植物	125	122	植物	207	215	植物	104	122	植物	68	74
人事	44	81	人事	113	217	人事	43	81	人事	68	130
	301	327		592	627		283	328		223	298

PとJの数字を比較すると、どの季題分類もほぼ同じような数字であるが、人事のみ、JがPの倍近い数になっている。人事は行事や料理、農業など、自然ではなく生活や文化に関わる項目となるので、日本的な季語がブラジル歳時記に取り込まれにくいことを表している。

11 「イペー」はさまざまな色があり、その中で黄色イペーがブラジルの国花である。

表4は、春の部の中での比較である。六つの列の項目について左から説明する。Pは、『NATUREZA』独自の季語、共通Pは二つの歳時記に共通する項目を『NATUREZA』の項目数で数えたもの、共通Jは同じく『自然諷詠』の項目数で数えたもの、またJのうち「ボ語○」がポルトガル語の翻訳があるもの、「ボ語×」がないものである。表3では季題分類別の季語数も「人事」を除いてほぼ同じであったが、だからといって内容が一致しているわけではないのが表4からわかる。

表4－春の部の季題分類別季語数（異なりと共通）

春	P	共通P	共通J	J	ボ語○	ボ語×
時候	8	19	13	11	6	5
天文	9	24	19	15	11	4
地理	0	12	9	4	1	3
動物	6	54	30	22	13	9
植物	35	90	51	71	59	12
人事	5	39	23	58	32	26

また、共通Pと共通Jの項目数が一致しない（共通Pの数が多い）のは、『NATUREZA』の項目に異名が多いためである。たとえば、次の表5は『NATUREZA』のハチドリの項目の記述をまとめたものである。

表5－『NATUREZA』Beija-flor（ハチドリ）の項

Beija-flor	ハチドリ	Várias espécies e coloração; pequenino, de voo muito veloz. Alimenta-se de néctar das flores e de insetos minúsculos. Poét. ave-flor. Sin. colibri, pica-flor, chupa-flor.	色も種も複数あり、飛ぶのが早くて小さな鳥。花蜜や小虫を食べて生きる。詩情：花鳥。類語：colibri, pica-flor, chupa-flor.
Colibri	ハチドリ	q. v. beija-flor.	参照：ハチドリ
Pica-flor	ハチドリ	q. v. beija-flor.	参照：ハチドリ
Chupa-flor	ハチドリ	q. v. beija-flor.	参照：ハチドリ

「ハチドリ」の項目の場合、Pの項目数は4（Beija-flor, Colibri, Pica-flor, Chupa-flor）と処理した。項目の説明が「q. v.（参照） ー」のみのため、Colibri以下は異名と考える。この場

合、PとJの共通項目はハチドリであり、Jは1、Pは4と数えている。動物や植物の名前はこのパターンが多い。¹²

季節分類の中で、サンプルとして春の動物の項について具体的な季語を掲げたのが表6である。

表6 - PとJの比較 春・動物

Pのみ	PとJ共通		J ポ語○	J ポ語×
João-de-barro	さえずり (2)	(ジャタイ蜂)	あさり	おそのまつり
João-barreiro	百千鳥	虻	いそぎんちゃく	落とし角
Barreiro	サビア (6)	春の蠅	うに	亀鳴く
Amassa-barro	ハチドリ (4)	春の蚊	馬さかる	桜貝
Forneiro	ベンテビー (2)	蛙	カンバシーラ	巣立ち
Butucaアブ	チョコチョコ	蝌蚪	しおまねき	たにし
	クリオー (3)	猫の恋 (3)	タンガラー	蠅生まる
	ピンタシルゴ	(子猫)	獺	蜂の巣
	アラポンガ (3)	仔馬	孕み鹿	引き鴨
	アズロン (4)	鳥交る	春の駒	
	ツバメ	鳥の巣 (2)	ピクード	
	地カナリオ	春の雀 (2)	蛇穴を出づ	
	蝶	雀の子	鱒	
	蜂 (2)	鳥帰る		
	(蜜蜂)	サワラ		
		イガイ		

『NATUREZA』のみしかない季語は6だが、そのうちJoão-de-barro以下5つはカマドドリとその異名である。また、残りの1つButucaは虻だが、実は別の虻という言葉もあり、そちらがJと対応する。実質的には『NATUREZA』独自の季語はJoão-de-barro (カマドドリ) のみと言ってよい。

「Jポ語○」は、『自然諷詠』にしかなくかつポルトガル語訳のある季語、つまり『NATUREZA』編纂の際に除外された季語である。「タンガラー」「ピクード」などブラジル季語でも除外されたものがあるが、「日本季語」(「孕み鹿」「蛇穴を出づ」など)がここでも再度選別されたことがわかる。動物全体では、『NATUREZA』はほぼ『自然諷詠』の季語から日本的な感覚の「日本季

12 翻訳者(ブラジル人)によると方言が多いのではないかとのことだが、ポルトガル語の詳細な分析が必要である。

語」を除いたものが季語項目として採用されている。この傾向は他の天文・人事などの季語分類でも同様である。

4.2.3 『自然諷詠』と『NATUREZA』の比較全体の考察

『自然諷詠』と『NATUREZA』の比較から二つのことが言える。一つ目は、『NATUREZA』の季語項目は、『自然諷詠』と重なる部分が多く、新たに立項された項目はあまりないが、動物・植物では『自然諷詠』に異名が多く立項されていることである。異名が多い理由は、いろいろな言い換えの言葉を準備することで韻律の調整ができるようにした、ブラジル各地の呼び名・方言を尊重した、などと推論できる。

もう一つは、『NATUREZA』の季語項目では、『自然諷詠』の中の「日本季語」がかなり取り除かれていることである。時候・天文の季語では、日本特有の詩情・感覚を持つ季語（山笑う、うららかなど）が、動植物では、動植物の一側面・現象を表す季語（亀鳴く、竹の秋など）、人事では、料理・農耕・忌日の季語が除外された。ただし、すべての日本季語が排除されたわけではなく、「猫の恋」「春惜しむ」「珈琲植う」など、ブラジル文化においても理解可能と判断されたものは『NATUREZA』に採用された。なお、「2.2 ブラジル季語の問題を巡る研究史」で触れた「ブラジル季語」の中で、農耕に関する季語やブラジル特有の現象を表す季語、日本季語の転用的季語は一部除外されたものがあつた。

増田1996では、自分の持論が「『ハイカイは日本の俳句の模倣ではなく、ブラジルの自然を諷詠するブラジルの短詩である』という理念」である、と述べ、「ブラジルの自然をハイカイとして詠むことは、自然の中にある“季節をあらわす季の詞”をテーマとすることに他ならず、“日本の季語を詠む”ことでは決してない」と言う。この考えは、先に引用した増田1995aの、この国ブラジルで詠まれた俳句の季語はすべてブラジルの季語である、という考えと矛盾しない。『NATUREZA』の季語項目のうち日本季語を除外したのは、日本の季語の強制ではないとする増田1996と一致する。だからブラジル季語の中の日系季語が除外されたのも首肯できる。ある意味日系季語は、ブラジル人というより日本ルーツの日系人からみたブラジルの自然である。『NATUREZA』は本当の意味でのブラジル季語を選択しようと試みたと言えよう。

5. 結論

以上、増田恆河のポルトガル語歳時記『NATUREZA』は、単に日本語歳時記をそのまま翻訳したのではなく、真のブラジル季語を選び出そうと努力した結果生まれたものであることが明らかになった。「真のブラジル季語」とは、ハイカイがブラジルの自然を諷詠するブラジルの短詩である、という理念のもとに、日本の思想そのままの季語を押し付けるのではなくブラジル人に

とって感覚やイメージを共有しやすい季語のことである。今回は紙幅の関係で紹介できなかったが、『NATUREZA』の季語説明には、Poét. (詩情) Sensação (感覚) を叙述した項目が1〜2割程度ある。これも、増田がほんとうの意味でのブラジル季語を意識した証左である。

『NATUREZA』は、ブラジルの自然をブラジルの詩情・感覚つきで季語として扱い編集し、日本的な感覚・イメージや日系俳句の感覚も融合した、画期的なブラジル歳時記である。この歳時記を編集するために、数年かけて例句や季題も準備・検討してきた。海外の歳時記として世界にも類を見ない。ブラジルのために日系人の視点からブラジル人の視点に転換し、「ブラジルハイカイ」という新たな短詩をブラジル文学に根付かせようとしたのが増田恆河であった。彼の活動の意義と影響は非常に大きい。

参考文献

GOGA, H. Masuda; ODA, Teruko. Natureza - berço do haikai. Kigologia e antologia. São Paulo: Diario Nippak, 1996.

MOTOYAMA, Gyokushu. Hawaii Poem Calendar: Hawaii Saijiki. Honolulu: Hakubundo, 1970.

TAVARES, Debora Fernandes. Grêmio Haikai Ipê - um desdobramento do haikai no Brasil. Dissertação apresentada ao Programa de Pós-Graduação em Língua, Literatura e Cultura Japonesa da Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas (FFLCH) da Universidade de São Paulo, 2019.

市毛暁雪編 「季題分類」『南十字星』1・2, 1937

梶本北民(編) 『ブラジル季寄せ』日伯毎日新聞社, 1981

栢野桂山 「俳諧小史」清谷益次・栢野桂山(著) 『ブラジル日系コロニア文芸 上巻』サンパウロ人文科学研究所, 2006. p. 153-227.

久富木原玲 「ブラジルにおけるハイカイ研究の現在—日本文化の受容・展開の様相」『愛知県立大学日本文化学部論集』9, 2019. p. 128-87.

佐藤牛童子編 『ブラジル歳時記』日毎叢書, 2006.

藤原マリ子 「ブラジルの歳時記—成立の経緯と特徴」東聖子・藤原マリ子編『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』笠間書院, 2012.

細川周平 「季語のない国—ブラジル季語をめぐる」『日系ブラジル移民文学Ⅱ』みすず書房, 2013.

間島稲花水・渡部南仙子(担当) (ブラジル俳人協会編) 『ブラジル歳時記』, 1988-78

増田秀一 「ブラジルにおけるハイカイの季語」『俳句文学館紀要』9, 1996. p. 1-14.

増田恆河 「ブラジルの季語」増田恆河(編) 『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』日伯毎日新聞社, 1995a. p. 354-360.

増田恆河 「あとがき」増田恆河(編) 『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』日伯毎日新聞社, 1995b. p. 361.

増田恆河(編) 『ブラジル俳句・季語集 自然諷詠』日伯毎日新聞社, 1995.

増田秀一 「ブラジルにおけるハイカイの近況」 『俳句文学館紀要』 8, 1994. p. 13-30.

増田秀一 「ブラジルのハイカイ」 『俳句文学館紀要』 4, 1986. p. 99-119.

ありがとう

Guilherme Castro氏に文献翻訳のご協力を、エウニセ・スエナガ氏・杉山欣也氏に、研究資料の提供や有益なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

なお、本論文は、科学研究費補助金（基盤研究（B）、課題番号21H00520）の交付を受けて行った研究成果の一部であります。